

ストーリー

1 仏教文化が花開いた会津の地勢と背景

太古の昔より、厳しい冬の豪雪と、一方その雪解け水がもたらす豊かな恵みという自然に生まれ、人々が暮らしてきた会津。東北地方で唯一古事記にその名を残す会津は、四周を深い山々に囲まれた辺境の地でありながらも、日本海側と太平洋側からの文化が会う場所として、また東北地方への入り口として、地政学的な要衝であった。古墳時代にはすでに中央国家との交流があったことから、仏教伝来と同時期に開かれたという^{たかから}高等伝承に見られるように、会津は仏教文化の流入も早かった。

会津へ伝わった仏教は、平安初期、奈良の東大寺や興福寺で学んだ僧・^{とくいつ}徳一が、山の神、^{ぼんだいみょうじん}磐梯明神を守護神として会津磐梯山の麓に開いた^{えにちじ}慧日寺によって会津一帯に広められた。慧日寺は、自然崇拝を素地とする会津の磐梯山信仰を受け継ぎ、仏教的に組み替えることで会津の信仰の中心となった。さらに徳一は^{あいつごやくし}会津五葉師ほか多くの寺院を開いて、人々の素朴な信仰を仏教、薬師・観音信仰に取り込んでいった。こうしたことにより会津は、^{しやうじやうじ やくしにょらいぎざう}今も勝常寺の薬師如来坐像をはじめとする平安初期から中世、近世の仏像や寺院が多く残り、東北地方でいち早く仏教文化が花開いた地として「^{ぶつと あいづ}仏都会津」と呼ばれる。その中でも^{さんじゅうさんかんのんめぐ}三十三観音巡りは、娯楽と一体となったおおらかな信仰の姿を今に残し、広く会津の人々に親しまれている。



木造徳一菩薩坐像



慧日寺 金堂



絹本着色恵日寺絵図



木造薬師如来

2 会津三十三観音の始まり

三十三の姿に身を変えて衆生を救うといわれる観音信仰から、平安時代に始まったとされる三十三観音巡り。本家西国三十三観音の成立以後、^{ぼんどう}坂東三十三観音など全国各地にさまざまな三十三観音がつくられた。

会津の三十三観音巡りは、^{ほしなまさゆき}会津藩祖保科正之により始まった。寛政20年（1643）、会津に入封した保科正之は、3代将軍徳川家光の異母弟として生まれ、家光と4代将軍家綱を支え江戸幕府の基礎を築いた名君として知られる。

保科正之が入封した当時は、徳川幕府の成立により治安や経済も安定し、参勤交代のための街道の整備も進んだため、全国的に伊勢参りや^{くまのさんけい}熊野参詣、西国三十三観音巡りなどが盛んであった。これは遠く離れた会津の領民の間でも同じで、片道ひと月、往復二月以上かかる大旅行に多くの人が出かけていた。この様子をみた殿様は、巡礼のために多額の費用が領外に流れることを案じて巡礼を禁止した。しかし巡礼は、観音様のご利益を願う民衆の信仰に基づくものであり、また諸国を観光する娯楽の側面もあったことから、単純に押さえつけることはできない。そこで代わりに会津三十三観音を定めたのである。領民の不満を募らせずに、資金、労働力の流出を防ぐ、名君の采配であった。

会津藩の領内には徳一の時代からの由緒ある仏寺がいたるところにあったこと、また、古代の霊場巡り以来の観音巡りが盛んな土地柄であったことから、老男女をはじめとした多くの領民たちによって、とくに農村部の女性たちによって盛んに三十三観音巡りが行われるようになった。こうして家を出て羽を伸ばすことの少ない彼女たちは、日頃の悩みを相談したり、温泉につかったりと、仲間とともに親睦と娯楽を兼ねた数日間の巡礼を楽しんだ。

さらに保科正之が、街道や宿駅を本格的に整備したことにより、会津領内だけでなく近隣の藩からも巡礼に訪れる人で賑わった。会津五街道の一つ^{しもつけかいどう おおうちじゆく}下野街道の大内宿では、蕎麦好きの正之が前任地から連れてきた職人によって会津に広めら

れた^{たかとおそば}高遠蕎麦や、ご飯を丸めて串にさし、地元ではじゅうねんと呼ばれるエゴマの味噌をぬって炭火で香ばしく焼いた素朴な郷土食しんごろうが、今も訪れる人の舌をうならせている。

殿様のアイディアにより身近になった観音霊場「会津三十三観音」は観音信仰と娯楽が結びつく形で領民たちに広く受け入れられた。



会津三十三観音 (左下り観音)



木造千手観音立像



下野街道・大内宿



高遠蕎麦・ねぎそば



しんごろう

3 その他の会津の三十三観音

その後会津には、南山地域の領民の^{ほつがん}発願により始まった^{おくらいり}御蔵入(奥会津) ^{おくあいづ}三十三観音や、城下町の寺を巡る^{まちまわ}町廻り三十三観音、小高い丘陵の中腹に地区の人が願いを込めて一戸一体刻んだ三十三体の観音像が安置されている久保田三十三観音など、さまざまな三十三観音がつくられ今に残る。

その一つ寛政八年(1796)に建立された^{きゅうしょうそうじさんそうどう}旧正宗寺三匠堂は、通称さざえ堂と呼ばれる^{らせん}螺旋状の三層六角の特徴的な観音堂である。

上りと下りが全く別の通路となる特殊な木造^{にじゅうらせん}二重螺旋構造により、参拝者はスロープを一方通行に進んで堂の天井部に至り、そのまま違うスロープを下って他の参拝者とすれ違うことなく出口にたどり着く。かつては三十三体の観音像がスロープに沿って安置され、参拝者はこの堂を一巡することで西国三十三観音巡りができるとされた。さざえ堂は、この不思議な建物を巡る楽しさと、手軽さから庶民の人気を博した。^{はいぶつきしゃく}廃仏毀釈により観音像は散逸したが、世界にも類を見ない独特の建物は、今も堂の内部を一巡すると異世界を潜り抜けるような不思議な感覚を体感できる。



4 三十三観音めぐりで感じる庶民の巡礼と娯楽

会津に三十三観音が定められてからは、体力的にも費用的にも身近なものとなり、人々は田畑の仕事が一段落した頃、三十三か所それぞれの^{ごえいか}「御詠歌」を唱えて霊場を巡礼した。

会津の三十三観音は、国宝^{ぞう}を蔵する寺院から山中に佇むひなびた石仏までその形は様々だが、今も息づく観音信仰に守られて地域のいたるところにその姿をとどめており、これら三十三観音を巡った道を、道中の宿場や門前町で一服しながらめぐること、往時の会津の人々のおおらかな信仰と娯楽を追体験することができるのである。

